

中日新聞朝刊

看護師、薬剤師「つながる会」発足について

団塊の世代が後期高齢者に

10年後の医療・介護備え

磐田市立総合病院で二十三日、団塊の世代の多くが後期高齢者（七十五歳以上）になる「二〇二五年問題」に向けて、市と森町の地域医療や介護の現場の問題を話し合う二つの組織の準備会が発足した。四月から本格的に活動するための具体的な内容を協議した。

磐田・森町が準備会

がりとともに、病院間の薬剤師が連携する「薬々連携」を目指す。発足式には両市町の十五施設から関係者約二十五人が出席。会の冒頭、市立総合病院薬剤部の正木銀三部長は「それぞれの施設がスクラムを組み、地域医療に貢献したい」とあいさつした。

今後は各会が年三、四回ほどずつ会合を開催。四月からは各病院の持つ専門知識や人材を有効活用し、医療の安全や感染対策、認知症看護などのレベルアップを図ることになっている。



単身の高齢者の世帯の増加や、介護職の不足が心配される。市立総合病院の平野一美看護部長が昨年十二月、同市のすずかけヘルスホスピタルの松本志保子看護部長に相談したのがきっかけで、対応を話し合う場が設けられた。

二つの組織のうち一つは「磐田市・森町の病院・訪問看護ステーションの看護代表者がつながる会」。患者が急性期から慢性期、回復期、在宅医療と変わ

会の趣旨を説明するすずかけヘルスホスピタルの松本看護部長（左）が磐田市立総合病院で

